

B-22

下垂体腺腫における Interleukin-6 (IL-6) の発現形態と局在

成高平治^{1, 2}、亀谷 徹¹、佐藤雄一¹、
土屋紅緒¹、鶴田智子¹、井上 洋²、
大谷光弘³、河瀬 斌³

¹北里大・医・病理、²東京歯科大・脳神経外科、³慶應大・医・脳神経外科

【目的】IL-6は内分泌と最も関連性のある cytokine とされ、下垂体ホルモンの分泌の調整及び腫瘍の増殖に関係する言われ、また下垂体腺腫そのものからも発現するとされ、しかしどの様な細胞から産生されるのか、まだ証明されていない。そこで我々はRT-PCR法にin situ hybridization (ISH)法を併用し、その発現形態と局在について検討した。【方法】ISHはIL-6産生口腔癌OCC-1を用いてcRNA probeを作製。下垂体腺腫109例について行った。RT-PCRは上記腺腫の内31例にて行った。

【結果】1) ISHでは109例中44例(40%)、RT-PCRでは31例中23例(74%)でIL-6 mRNAを発現。2) 機能性腺腫ではISHで43%、RT-PCRで82%。非機能性腺腫ではISHで31%、RT-PCRで64%に発現。3) 腺腫のtypeでは、ISHでGH 50%、PRL 36%、ACTH 57%、nonF 31%に発現し、RT-PCRではGH 80%、PRL 100%、ACTH 67%、nonF 64%に認めた。4) IL-6は腫瘍細胞質に発現し、83%はdiffuseに、17%はlocalizedに分布。一部腫瘍の細胞膜辺縁にのみ認め、腫瘍の血管周囲や間質にも局所的に認めた。【結語】大部分の腺腫でIL-6はdiffuseに発現した。機能性腺腫にやや多く発現を認め、ホルモン産生型間には大きな差を認めなかった。

B-23

ヒト腎動脈における α_1 -アドレナリン受容体サブタイプ mRNA の局在の検討

黒岡雄二¹、那須公雄²、亀山周二¹、森山信男¹、矢野純一²、辻本豪三³、河邊香月¹

¹東京大学泌尿器科、²日本新薬、³国立小児病院小児薬理

【目的】近年 α_1 -アドレナリン受容体は、3種のサブタイプが明らかにされ、さらに1994年には、1a, 1b, 1d に用語の統一がなされた。われわれはヒト腎血管における α_1 -アドレナリン受容体サブタイプ mRNA の局在を検討した。

【対象】腎悪性腫瘍患者26症例(男;18例、女;8例)を対象とした。平均年齢は58.4歳(30歳~78歳)であった。【方法】手術時に得られた腎摘出標本から腎動脈と腎実質正常部分を採取し、ただちにOTCに包埋した後、液体窒素にて凍結保存した。凍結切片作成の後、RNA probeを用い、ハイブリダイゼーション後、Dig-ELISA法により反応部位を検出した。【結果】腎動脈、弓形動脈、小葉間動脈、いずれにおいてもa, b, dすべてのサブタイプが存在した。各サブタイプは主として中膜の筋層にび漫性に局在した。尿細管には少なく、糸球体、静脈系にはほとんど認められなかった。【まとめ】腎動脈系には α_1 -受容体のすべてのサブタイプが存在した。RNase Protection assayにより、腎動脈系における各サブタイプの量と比率を検討中である。